Akita University

秋田大学教育文化学部研究紀要　人文科学・社会科学部門　77　pp. 1～10　2022

声の文化／文字の文化と視聴覚連祷

―― ジョナサン・スターンの「視聴覚連祷」批判の再検討 ――

和　泉　　浩

Orality, Literacy and Audiovisual Litany

IZUMI, Hiroshi

Abstract

The purpose of this article is to reconsider Walter Ong's famous concepts of 'orality / literacy' and Jonathan Stern's influential critique of 'the audiovisual litany'. In his critique of 'the audiovisual litany' Stern condemns the Ong's concepts, especially the concept of 'orality' for having roots deep 'in the Christian spiritualist tradition' and proposes the study of communication 'without a psychosocial, developmental concept such as orality'.

This article considers Stern's criticism through comparing 'the audiovisual litany' with the concept of 'gender', especially its social constructionist concept, both of which contain criticism of naturalistic understandings of body, in that this comparison elucidates the significance and problems of Stern's critique of 'the audiovisual litany' and his proposition of 'without orality'. This article argues that the proposition of 'without orality' is one-sided, because the concept of orality can be conceived in relations with its opposite: literacy, if they are dualistic concepts, so the proposition of 'without orality' needs to consider the positions of the concept of literacy. This article also argues that 'the audiovisual litany' becomes indispensable framework for scrutinizing historically 'the unacknowledged weight of a two-thousand-year-old Christian theology' on 'the audiovisual litany', like the concept of gender. If the concept of gender as dualistic concepts is problematic, we need the dualistic concepts to clarify its social cultural contexts, influences and problems, and this can lead to bring us the possibilities of their alternatives. The same can be said for 'the audiovisual litany'.

Key Words: Orality, Literacy, Audiovisual Litany, gender

完膚なきまでに反駁したあとでも，あいかわらずまったく同じことをテクストは語り続ける。

書かれたことばは，話されたことばがそこから生まれるいっそう完全なコンテクストからは切り離されている。

書くことによって，知るものは知られるものから分離され，それによって，内省活動はますます分節化されうるようになる。

W-J. オング

1．はじめに

さまざまな感覚に関する人文社会科学の研究が興隆するなかで，視覚以外の感覚が視覚と対置され，視覚および視覚中心のこれまでの研究が批判されることも多い。そうした批判はしばしば，視覚中心と特徴づけられる近代にも向けられている(1)。それでは，視覚以外の感覚と視覚との関係をどのように考えることができるのだろうか。これは，視覚以外の感覚に関する人文社会科学の研究でのきわめて重要な問いの一つといえるものである。これについてはさまざまな立場が主張されるとともに，この問いについてあいまいなまま，視覚以外の感覚と文化や社会，歴史との関係についてとりあげられることも多い。当然，あらゆる研究においてこの点を明らかにする必要があるわけでも，また立場の表明が必要なわけでもない。

本稿は，この視覚以外の感覚と視覚との社会的文化的関係について考えるために，特に聴覚（音）と視覚との関係をとりあげ，その関係の一端について以下の点から検討する。

聴覚と視覚との関係については，こんにち，ジョナサン・スターンによる「視聴覚連祷」(audiovisual litany) にたいする批判（Stern 2003 = 2015; 2011; 2012）が有名かつ大きな影響を与えている。「視聴覚連祷」の批判のなかでスターンは，特にウォルター・J・オングの，これもまた有名な「声の文化」(orality) と「文字の文化」(literacy) についての議論にたいする辛辣な批判を展開している。

Akita University

本稿では，このオングの「声の文化」と「文字の文化」，それにたいするスターンの批判を再検討することで，聴覚と視覚の関係のとらえ方およびそこに含まれる問題のいくつかについて考えてみたい[2]。

音の世界のなかで声は重要なものとはいえ，その一部分にすぎず，またその歴史的文化的な位置づけも変化し，多様である。歴史的変化について，たとえばスターンは19世紀の「音をある種の効果として理解」するようになる「音の科学」について次のように指摘している。

> それまで音の分析は特定の音源に向けられていた。音の理論は声と口を，あるいは音楽と特定の楽器（バイオリンなど）を，音響現象の分析と描写とモデル化とのための理念型として用いていた……対して，新しい音の科学は……音の理論における一般的なものと特殊なものを転倒させた……この新しい体制では，聴覚は，音において一様に作動するものとして理解されモデル化された。音源が何かは関係なかった。（Stern 2003 = 2015: 49-50）

声（声の文化）をモデルとして検討することが，聴覚と視覚との関係にすぐに一般化できるわけでなく，また声という特定の対象を選択するコンテクストについても注意する必要がある。さらに聴覚と視覚という2つの対象（区別）に焦点をあてる問いの立て方についても検討を要する。これらの点についても，そのすべてではないが，本稿で考えてみたい。

はじめにオングの「声の文化」と「文字の文化」の議論について簡単に振り返り，次にスターンの「視聴覚連祷」にたいする批判を再検討し，このことを通して，聴覚と視覚との関係のとらえ方，あるいは「視点」について検討する。

2．オングの「声の文化」と「文字の文化」

オングは『声の文化と文字の文化（*Orality and Literacy*）』において，「書くこと知らない」「一次的な声の文化」と「文字の文化」とを区別し，この「新しい発見」によって，人間について当然とされてきたもの，つまり文字をもとにした言葉や知識，思考のとらえ方を考え直すことが必要になると指摘している（Ong 1982 = 1991: 5-6）。それは，このそれぞれの文化には「心性」（mentality）（Ong 1982 = 1991: 9）の違いがあるためである。文字の文化にもとづく「心性」では，異なる文化の心性を適切にとらえることができない。オングはそうしたとらえ方は「馬を車輪のない自動車と考える」ようにおかしなものだと指摘している（Ong 1982 = 1991: 35）[3]。これは，（適切な言い方ではない面もあるが）より新しいもので，それ以前のもの，以前からあるものを説明しようとすることの不適切さを表しており，声の文化を文字の文化によって説明することの問題点を指摘したものである。

オングは，「声の文化」と「文字の文化」を「音」の世界と「視覚」の世界に対応させ，（一次的な）声の文化を，特に文字の文化以前のものと位置づけている。そして声から文字への変化は，考え方（心性）も変化させたと指摘している。「書くことは，話を，声と音の世界から新しい感覚の世界，つまり視覚の世界へと移動させることによって，話しと思考をともに変化させる」（Ong 1982 = 1991: 179）。

オングは，けっして声の文化と文字の文化の同時代における存在を否定しているわけでなく，「共時的」視点からのアプローチを有益なものと述べているが，「通時的あるいは歴史的」なアプローチが必要であり，それによって「準拠枠」にもとづいて時代の変化を理解し，過去と現在との比較ができるとしている（Ong 1982 = 1991: 7）。時代の変化の理解，そして前の時代との対比によるこんにちの理解のための通時的，歴史的視点をオングは重視する。

オングは声と結びつけている音について，次のようにとらえている。「音は，それが消えようとするときにしか存在しない。音は，たんに消滅しうるものであるばかりでなく，本質的に消えゆくものであり，そのように感じられている……音には……静止画にあたるものがない」（Ong 1982 = 1991: 73-4）。これは，音や声について一般的になされている特徴づけといってもいいものだろう。

音と同じく消えゆくものである声は，静止画のようなものではなく，文字のように不活性のものでもなく，「力動的」（Ong 1982 = 1991: 74）であり，そうした声にもとづく文化は，文字の文化と異なり，「知識を，人間の生活世界のなかに埋め込まれたままに」しておく（Ong 1982 = 1991: 97）。また「知られる対象」と「知る主体」との分離がなされておらず，「共有的な一体化」（Ong 1982 = 1991: 101）の状態になっている。それは，「視覚は分離し，音は合体させる」（Ong 1982 = 1991: 153）ものだからである。この点についてオングは，身体性との関連での外部と内部の違いから説明している（Ong 1982 = 1991: 154-5）。音のなかに浸ることはできるが，視覚のなかに浸ることはできない（Ong 1982 = 1991: 153）[4]。

音は周囲に広がり，そのなかに「わたし」が分離されることなく浸っており，その意味において「中心化作用」が働いているとともに「一つにする」ものであり，「内部を指し示すことができる」聴覚にもとづく声と音の世界が持つ特徴について，オングは次のように指摘している。「統合し，中心化し，内部をつくりだす音のエコノ

Akita University

ミー」において「累積的な（つまり，ハーモニーをめざす）傾向であって，切り離す傾向ではない（後者の傾向は……視覚化されたことばと調和する）……〔それは〕抽象的な思考ではない」（Ong 1982 = 1991: 156）。こうした声の文化はまた，保守的で伝統主義的な傾向があり，「知的な実験を禁止してしまう」（Ong 1982 = 1991: 92）。

これにたいして視覚中心の文字の文化では，ことばは「音から対象へ……全面的な変容」をとげ，「音をいっそう抽象的に分析し，それを空間的な構成要素に分解し……うつろいやすい音の世界を……視覚的な等価物に置き換える」（Ong 1982 = 1991: 188-9）。書くことによって言葉は，生きた人間，語り手やコンテクストから切り離され，「モノ」のようにとらえられるようになる（Ong 1982 = 1991: 32）(5)。コンテクストから遊離するために，コンテクストに縛られずに多様な「知的な実験」も可能になるが，コンテクストが忘れ去られるため，コンテクストに再び位置づけ直すことが必要にもなる。コンテクストはコンテクストと一体の状態では生じない。

声とは異なり文字は，「音そのものを一つの事物として表示し，うつろいゆく音の世界を，静止し半永久的な空間の世界に変形する」（Ong 1982 = 1991: 191）(6)。この文字の文化において，声の文化と対照的な特徴が生じる。「書くことは，知る者と知られるものとを分離し，そこに距離を置き，こうして，客観性をうちたてる一因となる……人間の生活世界の干渉を排除し……精緻で抽象的な世界を可能にする」（Ong 1982 = 1991: 235）。「共有的な一体化」の世界，浸っている状態から離れ，「正確さと分析的な厳密さを求める感覚が生まれ，内面化される」（Ong 1982 = 1991: 217）。また「秩序という概念そのものの感覚的基盤は，かなりの部分，視覚にある」（Ong 1982 = 1991: 223）とオングは述べている(7)。

生活世界とコンテクストから離れ，対象から距離をとる視点をもたらした「書くことによって……内省的活動はますます分節化され……客体的な世界に対立する内面的な自己……偉大な内省的な宗教的伝統」が可能になる（Ong 1982 = 1991: 219）。この宗教との関連はスターンが問題にしている点である。さらに，文字の文化は内省的な「内面的な自己」をもたらすだけでなく，特に「印刷は，閉じられているという感覚をうながした……一つの作品は，『閉じられたもの』……『独自性』や『創造性』というロマン主義的な概念を生みだした」（Ong 1982 = 1991: 270-4）。文字の文化は，主体（主観）と客体（客観）とともに，作品やその作者，芸術と天才といった概念とも結びついている。

こうした「声の文化」から「文字の文化」への変化から，オングはさらに，こんにちの，再び声が重要になるエレクトロニクス時代の電話，ラジオ，テレビによって形成される「二次的な声の文化」（Ong 1982 = 1991: 8-9）への移行を指摘している。この二次的な声の文化は，一次的な「声の文化と驚くほど似て」おり，「そのなかに人びとが参加するという神秘性をもち，共有的な感覚をはぐくみ，現在の瞬間を重んじ，さらには，きまり文句を用いさえする」（Ong 1982 = 1991: 279）。一次的な声の文化では，記憶するために「きまり文句」を用いる必要があり，したがってその文化の特徴の一つとされている。二次的な声の文化でも「きまり文句」が使用されるが，それは，「書かれたものと印刷の使用」に基礎をおいている。

オングはこのように，一次的な声の文化から文字の文化，そして二次的な声の文化という歴史的な変化をとおして，それぞれの文化での，特に声の文化と文字の文化での知識や思考，そして人間のあり方について検討している。そしてこの２つの文化について，「声の文化は理想ではなく，かつてそうだったこともない」（Ong 1982 = 1991: 355）というように，文字以前の状態を必ずしも理想化しているわけではない。しかし，スターンは，実際はオングが特定の立場からこうした変化の歴史を描いているとし，オングの聴覚にもとづく「声の文化」と視覚にもとづく「文字の文化」の区別，「視聴覚連祷」を批判している。次にスターンの「視聴覚連祷」の批判について検討する。

３．スターンによる「視聴覚連祷」批判

スターンが神学的な含意を込めて「視聴覚連祷」（audiovisual litany）と名づけて批判しているのは，以下のような聴覚と視覚の二項対立的なとらえ方である。

――聴覚は球状だが，視覚には指向性がある。
――聴覚に主体は浸るが，視覚は遠近感をもたらす。
――音は私たちのところにやって来るが，視覚はその対象に向かう。
――聴覚は内部に関わるが，視覚は表面に関わる。
――聴覚は外界との物理的接触を必然的に伴うが，視覚は外界からの距離を必要とする。
――聴覚は私たちを出来事の内側に位置づけるが，見ることは出来事を見渡す遠近感をもたらす。
――聴覚には主観的な傾向があるが，視覚には客観的な傾向がある。
――聴覚は私たちに生きた世界をもたらすが，視覚は委縮と死に向かわせる。
――聴覚は情動に関わるが，視覚は知性に関わる。
――聴覚は主として時間的な感覚だが，視覚は主として空間的な感覚である。

Akita University

――聴覚は私たちを世界の中に浸らせる感覚だが，視覚は私たちを世界から取り除く感覚である。
（Stern 2003: 15 = 2015: 28; 2011: 212; 2012: 9）

「視聴覚連祷」への批判によって，スターンは「超歴史的」（transhistorical）で「自然」なものとしてとらえられる傾向の強い「聴覚」と「視覚」の特徴づけと，こうしたとらえ方が前提としている「普遍的な人間主体」を問題視している[8]。それは，こうしたとらえ方が，「2000 年にわたる，聴くことに関するキリスト教神学の重荷を知らぬままに負っていることが多く」，「宗教的な偏見を普遍化」しているためである（Stern 2003 = 2015: 27-8）。

さらにスターンは，こうした「聞くことと見ることの差異に関する主張」が，「（肉体的にも精神的にも）個々の人間のレベルから始まる」という点も問題にしている。個々の人間に位置づけられることによって「聞くことと見ることとの差異」が「生物学的，精神的，肉体的な事実」とみなされるためである（Stern 2003 = 2015: 28）。「こうした点から音をとらえることは，原因と結果を誤認することになる」（Stern 2012: 9）[9]。これは音以外についてもあてはまる。

スターンは，キリスト教の宗教的偏見が「西洋の知の歴史のど真んなかに埋め込まれ」ているために，「視聴覚連祷」が「直感的な，明白な，あるいは説得力のあるもの」になっていると指摘しているが（Stern 2003 = 2015: 28），「視聴覚連祷」の「宗教的偏見」について，特に「神学的な関心に明確に突き動かされ」たものであり，「聴覚－魂／視覚－文字という枠ぐみの，最も一貫した現代的な記述」として（イエズス会士である）オングの「声の文化」と「文字の文化」についての議論をとりあげて批判している（Stern 2003 = 2015: 30-1; 2011）。スターンは次にように指摘している。「視聴覚連祷は……イデオロギー的である……それは本質的に，キリスト教的心霊主義〔Christian spiritualism〕における長きにわたる霊魂と文字との区別を言いかえたものだ」（Stern 2003 = 2015: 29-30）。オングの議論は，この「キリスト教的心霊主義の伝統にもとづいている」（Stern 2011: 208）。

スターンがオングの議論で特に問題にしているのは，声の文化から文字の文化へ，というオングの聴覚と視覚の通時的な歴史のとらえ方である[10]。オングの描く歴史は，「明らかに，そして性急に，いかにして近代に神の言葉を聞くかという問題へと結びつけられる……音にもとづく声の文化から視覚にもとづく文字の文化へというオングの移行の歴史は，近代の生活において『神が沈黙する』歴史なのである……それは……反近代主義者によるカトリックの教義なのである」（Stern 2003 = 2015: 31）。このため，特にオングの「オラリティ〔声の文化〕の概念は心霊主義的な神学の志向にもとづいている」とスターンは述べている（Stern 2011: 213）[11]。

上述のようにオングは，「一次的な声の文化」から「文字の文化」，そしてエレクトロニクスの技術による「二次的な声の文化」という 3 段階で歴史の変化を描いているが[12]，このことについてスターンは，「聴くことは見ることよりも神的なものにいっそう近い活動であり……オングは二次的な声の文化という新しい時代を可能性の出現としてとらえている」（Stern 2011: 218）と指摘し，「人びとが，この時代に神の言葉を聞くことのできる条件の理解を深めること」がオングの「研究の意図である」（Stern 2011: 213）と述べている。

スターンは ‘The Theology of Sound: A Critique of Orality’（2011）においてオングの初期の著作をとりあげ，『声の文化と文字の文化』では見えにくくなっているオングの神学的な意図と関心を明らかにしている。特に声と文字に関するオングの理解の誤りと偏見について，20 世紀半ばのキリスト教神学での議論（特にヘブライ語の *dabar* の語の意味に関する議論〔「*dabar*」は，「話」や「言葉」，「出来事」，「物」などを意味する語〕）を示しながら論じている。「オングの音 - 視覚の対比に関する重要な枠組みは *dabar* の語の意味に関する議論に依拠しており，ヘブライの思想とギリシアの思想の関係に関するより大きな問いをめぐって展開している」（Stern 2011: 213）。

スターンはオングの声の文化（オラリティ）と文字の文化（リテラシー）の概念が，トーレイフ・ボーマン（Thorleif Boman）の誤った議論の影響を受けたものととらえている。「ボーマンはヘブライの思想を力動的で時間的なもの，ギリシアの思想を静的で空間的なものとみなしている。ボーマンにとってユダヤ人は音の世界に，ギリシア人は光の世界に生きていた」（Stern 2011: 214）。この違いは，ヘブライ語の旧約聖書とギリシア語の新約聖書についての 20 世紀半ばの聖書についての研究の重要な問いにも関連するものだった（Stern 2011: 215）。

スターンは，ジェームズ・バー（James Barr）の研究にもとづき，ボーマンおよびボーマンにもとづくオングの議論の問題点を検討し，次のように述べている。「オングとボーマンの *dabar* についての解釈は，もともとそうした区別に関心のなかったヘブライの思想に霊魂／文字の区別を持ち込むトロイの木馬だった」（Stern 2011: 216）。「オングは聖書の解釈についての 20 世紀半ばの議論で示されたユダヤ／ギリシアの区別を，声／文字の区別一般のモデルとして取り入れた。オングはこの区別

Akita University

に歴史的な目的（historical telos）を付与し，そのことによってユダヤ的な構築物（constructs）からキリスト教的なものへと自然かつ必然的に進展するようになる」（Stern 2011: 214）。そのうえでオングの描く歴史は，声の文化という「無垢の状態からの堕落と，来るべき救済の可能性の物語」，文字の文化から二次的な声の文化へという物語になっている（Stern 2011: 219）。

このようにオングの声の文化と文字の文化の区別について検討したスターンは，次のように指摘する。「私たちは，オラリティ－リテラシーのモデルが，はるかに世俗的な文化理論と文化史にほんとうに適切なものかどうか問う必要がある」（Stern 2011: 219）。この問いにたいするスターンの答えは，言うまでもなく適切なものではない，である。

このようにスターンは，声の文化（オラリティ）を通時的な歴史のなかでの「文字以前」，さらに「キリスト教以前」に位置づけるオングの恣意的な区別を批判し，さらにマクルーハンが声の文化（オラリティ）を「非西洋文化」に位置づけたことへの批判へと拡張する。「オラリティの概念はさまざまな文化が同時代に存在していることを否定する。それは空間的差異を時間的差異に変え，他のところで生きている人たちが過去に生きているものとしてしまう……同時代性の否定は本質的に政治的意思表示である」（Stern 2011: 220）。そしてスターンは，「非西洋」のとらえ方として問題があるとすれば，文字の文化以前の西洋を声の文化として描くことも妥当でないと指摘し，そこに存在していた絵や彫刻，建築，楽器といった「初期メディア」について考える必要があると指摘する（Stern 2011: 220-1）[13]。

以上のような検討から，「オラリティ」の概念をなくした方がいいというのが ‘The Theology of Sound’ でのスターンの結論である。「感覚や文化的差異についての時代遅れになった概念を脇に置き，オラリティといった社会心理的で発達的な概念なしにコミュニケーションについてのグローバルな歴史と人類学を構築してもいい時機だ」（Stern 2011: 222）。

『聞こえくる過去』では，オングへの批判の検討から次のような提案を行っている。「視聴覚連祷は，科学的な装いをしているけれども……神学的な重みをひきずっている。なので，視聴覚連祷を反転させるよりも，音を記述し直すというのはどうだろうか……歴史は諸感覚の間に存在するのと同じように諸感覚の内部にも存在する……」（Stern 2003 = 2015: 32）。『聞こえくる過去』がどの程度このことに成功しているかの評価は分かれるだろうが，「視聴覚連祷」にたいする批判は鋭くかつ適切な面があると考えられる。しかし問題がない，というわけでもない。

4．「視聴覚連祷」とジェンダー

「視聴覚連祷」への批判の意義と問題点は，性差についての議論を経由することでより明確になるだろう。これはともに身体に関する区別とその特徴づけにかかわるものだからである。

聴覚／視覚の二項対立を女／男の性の二項対立に，視聴覚連祷を女／男についてのそれぞれの特徴づけ，つまりジェンダーに対応させて考えることができる。さらにこれらの特徴づけについて聴覚－女／視覚－男の関係を考えることもできる（これに非西洋／西洋なども重ね合わせることもできる）。女／男の特徴づけは「宗教的偏見」とも結びついているため，「性差連祷」（sexual litany）について論じることもできるだろう。

こうした対応関係を考えると，スターンの視聴覚連祷の批判は，ジェンダーの問題の指摘と同じということができる。身体的な区別（聴覚／視覚，女／男）に与えられた特徴づけ（連祷）について，それが生物学的な本質（「超歴史的な，自然な性質」）に由来する区別ではなく，社会文化的なものである，という性についての社会構築主義的な指摘である。そして，女／男の特徴づけと不平等がそれを「反転」させることで解決できるものでないのと同じく，聴覚／視覚についても，視覚中心の状況にたいして聴覚を優位に立たせるように反転させればいい，という話にはならない[14]。歴史のなかでの「音を記述し直す」というスターンの試みは，「自然」ととらえられてきた性（の特徴づけ，ジェンダー）を歴史研究を通して攪乱する試みに，また「諸感覚の内部」に歴史を見ようとする視点は，生物学的差異に歴史を見る視点に対応させることができる。

こうした対応の指摘によって，スターンの議論を二番煎じとして貶めようというのではけっしてない。このことによってスターンの「視聴覚連祷」の意義，あるいはスターンの視点と戦略，さらに検討すべき点や展開の可能性を明らかにすることが狙いである[15]。

まず，「オラリティ」の概念をなくした方がいいというスターンの主張は，この対応関係から考えると，どうなるだろうか。「女」という概念に問題があるため，それをなくそうということになるだろうか。それでは，なぜ「リテラシー」はそのままにされるのだろうか。リテラシーだけで歴史や社会を考えることは可能なのだろうか[16]。

この点についてオングは以下のように指摘している。「文字文化は……先行者がいたという記憶さえ破壊しかねない。けれども……文字文化によって，その先行者の記憶も再建されうる……こうした再構成がなされれば……文字文化とは，そもそもなんであったのか」が理解できるようになる（Ong 1982 = 1991: 40）。文字文化

Akita University

（リテラシー）によって，それとは異なるもの（他者）が破壊されるもするが，それを把握・保持できる（再構成できる）ようになり，また異なるものとの対比によって文字文化自体についても理解できるようになる。

また，印刷されたテクストを研究対象にする「テクスト主義」についてのものではあるが，オングは次のように指摘している。「テクスト主義がなければ，声の文化はそれとして認められることすらできないだろう。また，声の文化がなければ，テクスト主義は，どちらかといえば不透明となり，一種のオカルティズム……になりがちである」（Ong 1982 = 1991: 345）。（スピリチュアリズムにもとづく）オラリティなしではリテラシーも「一種のオカルティズム」になるといえるかはわからないが，リテラシーだけでは概念として成り立たないのではないだろうか[17]。

「オラリティ」をなしにすることを主張する以前の著作ということになるが，『聞こえくる過去』を「視聴覚連祷」の聴覚の特徴づけの部分，あるいは「視聴覚連祷」自体なしに書くことは可能なのだろうか。『聞こえくる過去』は視覚と聴覚についての特徴づけ（視聴覚連祷）を部分的に攪乱させてはいるが，それは聴覚／視覚の対比と既存のとらえ方（視聴覚連祷）を前提にしている。「オラリティなしに」とは，いったいどのようなことを意味するのだろうか。

こうした対応関係を考えてみると不明確な点が生じる。「オラリティ」は「視聴覚連祷」のどこに位置づけられるのだろうか。オングは声の文化と音を関わらせていたため，聴覚についての特徴づけの部分だろうか。それとも視覚を含んだ全体だろうか。そうだとすると，「リテラシー」はどこに位置づけられるのだろうか。オングの「オラリティ」と「リテラシー」を合わせたものが「視聴覚連祷」の「2000 年にわたる，聴くことに関するキリスト教神学の重荷」（Stern 2003 = 2015: 27）を負ったものと言えるが，この点が，特に「オラリティなしに」という主張との関連で明確でない。また「視聴覚連祷」を批判し，その問題点を検討することと，それをなしにすることは別である。なしにした場合，その問題点の検討もできなくなる。

「視聴覚連祷」は身体についての特徴づけが自然のものでなく，文化的社会的なものであり，その歴史を指摘した点で適切な指摘だといえる。しかし，それをオングのオラリティ（声の文化）／リテラシー（文字の文化）の議論を重ねるとき，つまりオングへの批判と「視聴覚連祷」を結びつけるとき，そこに不明確な点が生じている[18]。それは，そこにおいて，生物学的なものと文化的社会的なものとの関係，「聴覚と聴取」の関係[19]が不明確になっているためではないだろうか。

「オラリティ」についてのスターンの批判は，オングの宗教的立場での議論とともに，通時的にも共時的にも，特定の時代や集団を単一の，特定の特徴でとらえることへの批判である。ある集団を一つの集団をなすものとして，そして特定の特徴を持つものとしてとらえることの問題，「文化」や「社会」の概念自体にかかわる問題であり，「女性」や「非西洋」，「東洋」といった一括りにしたとらえ方とその特徴づけにも重なる問題である。それは当然，その対立概念にもあてはまる。

たとえば，スターンは「視聴覚連祷」の批判から，「私たちは合理性と近代的な知のあり方との源泉を問い直すことができるのだ」（Stern 2003 = 2015: 32）としているが，「近代」（の西洋の特に白人男性）[20]と「合理性」という特徴づけについてもこのことをあてはめて考えることができる。こうしたとらえ方の問題点は，その「源泉を問い直す」ことから明らかになることかもしれないが，それは合理性の概念と近代の結びつきを検討することを通してのことである。上で指摘した点と重なるが，「オラリティ」についても同様のことがいえる。明らかにするためには何らかの枠組みが必要であり，「オラリティ」も「視聴覚連祷」も，その問題点を十分に認識する必要があるが，問題を明らかにするための有益な枠組みになるのではないだろうか（そして，スターン自身，そうしているのではないだろうか）。

この点にさらに関連して，オングはたしかに「オラリティ」を「文化」としてとらえているが（このため邦訳でも「声の文化」となっており，本稿でもこの記述を部分的に使用している），「オラリティ」を特定の集団を特徴づける「文化」の概念と（完全には不可能かもしれないが）ある程度切り離してとらえることはできないのだろうか。「リテラシー」の場合はそうしたこともイメージし，スターンは「リテラシー」なしで，という主張をしていないのではないのだろうか（それが「自分たちのもの」だから，といったことはないだろう）。

「視聴覚連祷」については，その「2000 年にわたる」歴史と伝統をどのようにとらえるのか，という問題もある。その歴史のなかには，スターンが『聞こえくる過去』で明らかにしているように「視聴覚連祷」の区分に合わない状況もたしかに無数に存在してきたことだろう。しかし，「視聴覚連祷」の区分に合致したようにとらえられる状況も多くあり，したがって 2000 年にわたる歴史と伝統ということになる（このことによって，『聞こえくる過去』で，さまざまな資料を示しながら，そう見えるかもしれないが実は……という説明が必要になり，またスターンによる「異なる」説明の効力も生じる）。その 2000 年にわたる歴史と伝統をどのようにとらえるのだろうか。

Akita University

『聞こえくる過去』のアプローチについてスターンは「確かに事実は私の歴史にとって重要だが，私の意図は歴史的事実を最終的に確定することではない。むしろ本書は歴史をある種の哲学的な実験室として用いている」（Stern 2003 = 2015: 44）と説明している。

スターンの『聞こえくる過去』での「実験」は哲学的なものにとどまらないようではあるが，それは「真に歴史主義者的な理解……構築主義者と文脈主義者たちによる社会的で文化的な思考の系譜に加わる」（Stern 2003 = 2015: 16）ことによって，特に19世紀の「音響再生産技術が残した文書」（Stern 2003 = 2015: 19）をもとに，「視聴覚連祷」のなかの視覚と聴覚の区分を攪乱するような歴史を明らかにするとともに以下のことを明らかにしようとする。技術が広まる技術以前の状況，「文化的・社会的，身体的な活動が結合した領域」，あるいは「先行条件」としての諸実践，「そもそもその経験が最初に可能となった諸条件」，技術の前に展開する音に関する「体制」を明らかにすること（Stern 2003 = 2015: 20, 39, 45, 50）。このことによって，「人間の活動に関するあらゆる説明」が含んでいる「人間の本質に関する何らかの概念」について思索的に切りこみ，「音，技術，文化に関して新しい問いを提示することを学ぶ」こと，これがスターンの実験と試みである（Stern 2003 = 2015: 44）。

こうした「新しい問い」も必要かつ重要ではあるが，「視聴覚連祷」についての，ジェンダーやセクシュアリティなどについてなされてきたような，どのようにして「視聴覚連祷」が「自然」ととらえられるようになったのか，またそうあり続けているのかという問いも，新しくはないかもしれないが必要だろう。そうした歴史と「実験」との関係が不明確である。また，プラトンやフーコーなどにも触れているとはいえ，「視聴覚連祷」の批判で取り上げられているのは主にオングの議論である。（これは当然のことのため省略されたのかもしれないが）オング以外はどうなのか，「視聴覚連祷」のそれぞれの点はどれほど一般化可能なのか，ということの検討も必要だろう。

歴史的社会的条件を明らかにするという意図によるものだと考えられるが，「視聴覚連祷」の説明には「近代」と結びつく用語や考え方が用いられている。この場合，2000年の歴史（そのなかでの差異や変遷）との関連をどのように考えるのか，さらにそれによる影響（の違い）についても検討が必要だろう。こうしたことは，「視聴覚連祷」を崩すという意図での実験によっては，見えなくなる可能性があるのかもしれない。

スターンによるオングの批判は宗教的偏見への批判が前面に出ているため少し不鮮明になっているが，この2000年にわたる歴史をとらえるうえでのオングの問題点は，聴覚と視覚の本質主義的なとらえ方にあるということを「視聴覚連祷」は気づかせてくれる。

オングの2000年をこえる「声の文化」から「文字の文化」への歴史は，声と音（聴覚），文字と視覚およびそのそれぞれに伴う「心性」が基本的に変化しないということを前提にしている。これが聴覚や視覚の特徴づけを「自然」のものとみなすという問題，本質主義的なとらえ方の問題である。それらは自然のもの，生物学的なものではなく，それ自体が「文化」である。この点について，オングも「声の文化」が「文字の文化」による「再構成」ということを認識していたが，聴覚と視覚については歴史や文化による差異を十分に考慮していなかったといえるだろう。『聞こえくる過去』では，近代での「諸感覚そのものの個別化，分離，変容」の「身体の歴史」（Stern 2003 = 2015: 70）が描かれているが，感覚のとらえ方自体の近代性を考慮した上での「再構成」についても，オングの議論のみならず考える必要がある。

歴史における転換についてスターンは，フーコーが『臨床医学の誕生』で「まなざし」（視覚）の点からとらえた医学知識の体制について[21]，聴診器によって間主観的な会話（声）から身体の音（「音を発する身体」）へと転換したものとして描いている（Stern 2003 = 2015: 148）。「声」から「音」へ。あるいは聴覚の「体制」の変化。これについては，オングにたいする「文化」の批判はあてはまらないのだろうか。「文化」でなく「体制」（regime）であればいいのだろうか。

この医療知識の体制についての「声」から「音」への変化は，オングの歴史のとらえ方を応用して，「一次的な声」から「音」，そして「二次的な声」の体制へ，と見方によってはとらえることができるかもしれない。しかし，こうした歴史も，多様な医療や他の文化も見たとき，異なったとらえ方になるだろう。こうした体制の変化を描くことについては，どのように考えるのだろうか。

5．おわりに――「あんたにゃ鳥でも」

本稿では，スターンによる「視聴覚連祷」とオングの「声の文化」（オラリティ）にたいする批判について検討したが，おわりに本稿でとりあげた問題について，スティーブン・フェルドのカルリの研究をとりあげる。

フェルドが「カルリの民族鳥類学」を解釈しようとしていたときの話である。「……突然なにかが鳴いた。私は質問し，ジュビはすぐさま言い返した。『きけよ。あんたにゃ鳥でも，おれにとっちゃ森の声なんだ。』私は，この言葉に驚いた」，このことは，「私が知識構築の方法を――分離と還元――を，カルリがそうしない経験の領域に押しつけようとしたことを意味している」（Feld

Akita University

1982 = 1988: 71)[22]。

このことによって，フェルドの「知識構築の方法」が批判されるものではないだろう。それによって，「他の」方法が見いだされるからである。そして，その「他のもの」についてもフェルドの変化した「知識構築の方法」のなかでとらえられ，説明され，記述されていく。フェルドのここでの話は，オングの「オラリティ」／「リテラシー」と重なる（フェルドは声，音の世界を重視し，それを文字で再構成する）。本稿での結論は，「オラリティ」／「リテラシー」や「視聴覚連祷」についても，フェルドの例の「知識構築の方法」としてとらえることができるのではないか，ということである。この点については，本稿では十分に検討できなかった点もあるため，別稿においてさらに検討してみたい。

もう一つ，本稿で検討できなかった点について最後にあげておく。別稿でティム・インゴルドの「反サウドスケープ論」について検討したが（和泉 2018），インゴルドの問題の指摘も，オングの「声の文化」／「文字の文化」と重なる点がある。インゴルドは，ある意味ではオング以上に，といってもいいだろうが，「文字の文化」と「近代」を批判し，それにたいする経験に「浸ること」を重視する。浸るというのは，「視聴覚連祷」では「声」の特徴となっているものであり，この点で，インゴルドの議論は，オングの「声の文化」／「文字の文化」と重なり，したがって「視聴覚連祷」にもとづく「神学的な議論」としてとらえることもできる。

この点についてもさらに検討を要するが，こうした点について気づかせてくれるスターンの「視聴覚連祷」の批判は，さまざまな感覚と社会，文化，歴史との関係を考えるうえで重要な指摘である。しかし，視覚と聴覚に関連する議論の批判にごく容易に利用できるものでもあるため，スターン自身が本質主義と構築主義について指摘している「哲学的な衛生学」に「視聴覚連祷」批判も陥らないようにするべきだろう。そのためにも，さまざまな特徴をまとめている「視聴覚連祷」の個々の内容についてのより詳細な検討も必要である。

【注】

（1）この点については多くの文献で指摘されているが，別稿でも取り上げている（和泉 2016）。本稿において邦訳を文脈に合わせて，一部改変して使用した箇所がある。

（2）著名なスターンが批判しているため，オングの議論とスターンの批判について筆者が再検討する必要性はないかもしれない。しかし著名な研究者の批判によって，その中身が十分に検討されることなく批判の対象の価値が急落するという現象が生じることがよくあるが，サウドスタディーズでもこうしたことが生じているようである。こうしたものの一つとして筆者は別稿においてサウンドスケープの概念とそれにたいするティム・インゴルドの批判を検討した（和泉 2018; 2019）。

（3）このたとえは，「口承文学」という「おかしな言いかた」についてオングが説明するなかであげられている。

（4）これは比較の対象が誤っているともいえる。音にたいするものは光とも考えられ，光のなかには浸ることができる。インゴルドは次のように指摘している。「私たちはよく，視覚（sight）と音を比較する。視覚と音を比較することは，視覚と聴覚を比較することと同じように普通よく行われている。多くの著者が，音（sound）と聴覚（hearing）を互換的に使用しており，実際にまったく同じ現象を指しているかのようである。しかし，視覚と音がよく比べられるとしても，光と聴覚はそうではない。聴覚と音がしばしば同義語とみなされるとしても，視覚と光は反意語として扱われそうである」（Ingold 2005: 98）。スターンも次のように指摘している。「音の歴史……このフレーズには不安な響きがある。何しろ眼に見える世界を研究する者たちは『光の歴史』は書かないだろうからだ（おそらく彼らは書くべきなのに）」（Stern 2003=2015: 22）。特にインゴルドの議論については別稿で検討した（和泉 2018）。

（5）「モノのように」といえば，エミール・デュルケムの有名な「社会的事実をモノのように考察する」という規準があるが，これもコンテクストからの遊離，したがってオングの区別での文字の文化に結びついているといえるだろう。こうした点は芸術や芸術作品にもあてはまる。

（6）これはオングがアルファベットについて指摘しているものである。

（7）これはオングが「文字言語」による文法と慣用の「正しさ」，その「規範的な力」について指摘した箇所の言葉である。

（8）スターンも述べているが，音のこうした性格のため，「音楽は歴史の外部に位置する」ものととらえられる傾向にあったが（Stern 2003 = 2015: 29，536 注 38），20 世紀後半以降の音楽に関する研究は，スターンの試みと同様にといってもいいだろうが，それを歴史的なコンテクストに位置づけようとしてきた。

（9）スターンはピエール・ブルデューなどの議論をもとに，個人（や技術など）ではなく，「ハビトゥス」，「実践と関係」，「経験の条件」から音に関する歴史や現象をとらえようとしている（後述）。ここでのスターンの指摘は，感覚と社会や文化との関係についての研究と共通する視点である。感覚に社会的文化的な面があるため，人文社会科学での研究対象にもなる（和泉 2016）。

（10）スターンはオングの「感覚中枢」という語の使用についても，時代遅れの概念の使用として批判している（Stern 2003 = 2015: 30; 2011: 220）。

（11）スターンは，「オラリティがコミュニケーションについての歴史の記述のなかで非常に影響力のあるドクサをなしているのは，それがまさにキリスト教心霊主義のカテゴリーを呼び覚ますからである」（Stern 2011: 209）と指摘している。

（12）スターンは，「声の文化」（orality）から「文字の文化」

Akita University

(literacy)，そして声のある種の回帰である「電子的な文化」(electronic culture) へという「3幕」からなる「年代物の寓話」,「声 - 文字 - 電子図式」が, コミュニケーションの歴史の説明で，いまだに影響を及ぼしていると指摘している（Stern 2011: 208）

(13) オングは「書かれたものの起源はおそらく，話しの起源とおなじころまでさかのぼることになるだろう」(Ong 1982 = 1991: 178）と指摘し，スターンが「初期メディア」と呼んでいるものを無視しているわけではない。しかし，そうしたメディアをオングは軽視している。

(14) 以上の点は，いうまでもなく，性だけでなく，人種などのとらえ方とも対応させることができる。

(15) スターンは「視聴覚連祷に対する私の批判は，しばしば哲学的な衛生学に退化してしまっている本質主義あるいは社会構築主義の諸問題に留まらない」(Stern 2003=2015: 32）と述べているが，その諸問題をどのように超えている（'go far beyond'）のか, そこにどう留まっていないのか不明である。

(16) スターンはオングへの批判のなかで，ジャック・デリダの脱構築をとりあげているが,「書き言葉」の「特権化」についてとりあげてすぐに，「ここで少し違う話題に移りたい」（'Here, I want to make a slightly different move'）として，自らのアプローチについての説明を行っている。すべてのことを検討することは不可能だとしても，突然中断して話題を変えるのでなく，もう少し検討を進める必要があるのではないだろうか。

(17) オングはプラトンについて次のように指摘している。「プラトンはかれの音声中心主義，つまり書くことよりも声としてのことばを重んじるかれの立場をはっきりとしかも効果的に言い表すことができたのは，逆説的なことだが，ただただ，かれが書くことができたからだった」(Ong 1982 = 1991: 341)。オングは「オラリティ」が「リテラシー」によって成り立つという面を十分に認識している。

(18) これはたんに筆者の理解不足によるものかもしれない。

(19)「視聴覚連祷の最大の間違いは，聴覚と聴取を同一視していることだ」(Stern 2003=2015: 33）とスターンは指摘している。これは，性との対応で考えると，セックスとジェンダーの同一視ということになるだろう。それでは区別して，その関係をどうとらえるのか。ここがあいまいである。

(20) スターンのさまざまな議論への目配りとバランス感覚は瞠目に値するが,『聞こえくる過去』において，近代や白人男性，特定の地域を対象とすることについても注意深い説明を行っている。

(21) スターンは，フーコーの議論も「視聴覚連祷」にもとづく「感覚の起源と目的についての本質的に神学的な議論である」(Stern 2003 = 2015: 30; 2011: 160）と批判している。

(22) スターンが引用しているが，フェルドはカーペンターとマクルーハンにたいする批判として,「オーラル／リテラル」という区別が,「オーラルとリテラルの相互作用の社会的な詳細さ，歴史的正確性と複雑さをあいまいにしたり, 無視」する「無差別の一般化」と述べている。こうした議論をもとにスターンはオングの「声の文化」のとらえ方，特に声の文化と文字の文化の「同時代性の拒否」について批判している（Stern 2011: 220)。ところで，フェルドは「おれ」を「カルリ」に自然に変換しているが, そもそも「カルリ」とは誰なのだろうか。フェルドは自らが説明した鳥の分類について次のように述べている。それは「カルリの女性が鳥について知っていることは何も表していない……一般に女性の鳥に関する知識は，経験豊かな中年男性の狩人がもっている知識に比べてたいへん限定されている」(Feld 1982 = 1988: 88)。フェルドはこの点を指摘したうえで，カルリ社会の「より広範に見いだされる鳥の世界の特徴」を明らかにしようとしているが，その箇所の結論において「女性や少年がこうした図式を使って鳥を認識したり実用的に役立てることはない」(Feld 1982 = 1988: 116）と述べている。「無差別の一般化」は，批判はしやすいが難しい問題である。ある社会や文化での特定の職の「経験豊かな中年男性」の考えを，その社会や文化一般のものとみなすことには当然問題があり，フェルドもこの点を認識してはいるが，結果的にどうなっているのだろうか。フェルドの「アコーステモロジー」は誰のものなのだろうか。

【参考文献】

Feld, Steven, 1982, *Sounds and Sentiment: Birds, Weeping, Poetics, and Song in Kaluli Expression,* the University of Pennsylvania Press.（= 1988，山口修・山田陽一・ト田隆嗣・藤田隆則訳『鳥になった少年――カルリ社会における音・神話・象徴』平凡社.）

Ingold, Tim, 2005, 'The Eye of the Storm: Visual Perception and the Weather,' *Visual Studies*, Vol.20, No.2, Routledge, 97-104.

和泉浩, 2016,「感覚の社会学, 聴覚文化の社会学の視角」『秋田大学教育文化学部紀要』第 71 集，25-36.

―――，2018,「ティム・インゴルドの反サウンドスケープ論――音と光，サンドスケープとランドスケープ」『秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学』第 73 集，11-21.

―――，2019,「サウンドスケープ概念の再検討――アリ・ケルマン，ステファン・ヘルムライヒらによるサウンドスケープの批判的検討について」『秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学』第 74 集，13-25.

Ong, Walter Jackson, 1982, *Orality and Literacy: The Technology of the World,* Methuen.（= 1991 年，桜井直文ほか訳『声の文化と文字の文化』藤原書店.）

Stern, Jonathan, 2003, *The Audible Past: Cultural Origins of Sound Reproduction,* Durham: Duke University Press.（= 2015，中川克志・金子智太郎・谷口文和訳『聞こえくる過去――音響再生産の文化的起源』インスクリプト.）

Akita University

———, 2011, 'The Theology of Sound: A Critique of Orality', *Canadian Journal of Communication,* Vol.36, 207-225.

———, 2012, 'Sonic Imagination', Jonathan Sterne ed., *The Sound Studies Reader*, London and New York: Routledge, 1-17.